



### 幸福の学と生きるすべ

苦惱というものがある。苦しみよ去れ。しかし、いかにして。苦惱を断ち切ることについて、幸福の学はわれにこう教える。この世は苦である。人生は悪夢にすぎぬ。目覚めよ！ よりよい人生、より美しい眞実がある。

苦しみを終わらせよ。不幸を死に至らしめよ。労働という別の苦痛によってではなく、自らの内なる苦しみの原因を知ることによって。悲嘆の闇、苦悶の暗夜、不安

の未明、心労と不満で色を失った夜明け、知性のまばゆき光のもとで、これらは消え去る。

明晰な観念によって心を鎮め、精神から偽りの思考を洗い流そう。神話、誇大な幻想、巣くつた悪魔と内なる暴君、癒し得ぬ渴きの元となる幻影、無知のなせる業、隸属の手先き、これらは明晰な知性の風が吹いたときに、一掃される。精神の健全なる者たちに幸福あれ！

意識のもっとも高い段階に上るう。こうするだけで、この現代世界に蔓延する不幸は収まるであろう。

それ故、世界を知れ、それがどこから来たかを知れ、

### そしてその行く先を選択しよう。

われわれが自らに行なえることは多々ある。自由を知れ。自らで自らを作ろう。不幸から解き放たれよ。自由に値する者が自由なのだ。自分を知ることにより、全体性——破れ目を合せ、結び付け、和解させ、そして引き裂く。また完全で、静かで、味わいのある平安でもある——についての完全なる意識に向かおう。

光、感情、そして希望の言葉がある。  
「わたしは、苦惱と苦惱の終わりを教える」——最初にして永遠の英知の最良の言葉である。

サンスクリット語でブッディ (Boudhi) は、英知、知性、そして意識の最高段階での覚醒、及び光、知 (bodhi) へと導く深遠な理解——とある。したがって、仏教 (ブッダイズム、Buddhism) は「覚醒」<sup>(1)</sup>とふつう訳されるが、実は単に英知、知性、理解、あるいはこれらに対する共感、すなわち語源（ソフィア、sophia）と知識と態度という三重の意味における哲学を指すのである（ギリシャ語はよく引き合いに出されるのに、なぜサンスクリット語まで遡らないのであるか）。そしてここから、仏教者（ブ

ッディスト、Boudhist）とは、英知、理解、分析と直観による認識、諸科学の知識、及び審美意識を求めるんとする哲学者を意味する。

しかし仏教とは、この名をもち、この名にふさわしい、より特有の、より豊かな哲学をもさす。その主題はわれわれ自身である。その目的は人間的条件の最も根本的な諸問題を解くことにある。このことが、仏教をこの問題の本質的側面についての他のすべての哲学をはるかに超える認識へと導くことになる。

この本質的側面の第一のものは個人、自由、幸福であるが、このことは他のどの時代の文明にもまして、現代文明がこれらに関する知識とその解決を迫られていることでわかる。それゆえ、われわれの個人的なミクロコスモスとともに、人類というマクロコスモスとその歴史を把握し、尊くためには、卓越した深い仏教思想への認識が絶対に不可欠なのである。

本稿は最も明瞭な仕方で、われわれについて、またわれわれのために書かれたものである。しかし古典的な仏教が何をいつているかに耳を傾けてみよう。仏教とは何

であるといつてゐるか。仏教は何をなしたか。仏教はわれわれにとつて何をなしうるか。

苦惱を取り除くこと。仏教はこう定義される。「なん

じは何者であるか」という問ひに、仏教はこう答える。

仏教は幸福の学である。仏教は、不満、心配、苦悶、

悲嘆、不幸を消滅させるものであるといえる。

仏教は何よりも心理現象を認識することにあり、（こ

れを無視した）他のすべての認識はその残りかすにすぎない。

以下に述べるように、仏教は人間、自由、哲学、科学の基礎を作り上げた。したがつて、人類の半数にその印を刻したという以上に、仏教はわれわれの現代世界の源なのである。しかし仏教はまた、現代世界の諸問題についての前もつての解答である。さらに、現代世界の未來像でもある。なぜなら、仏教は完全なる解放であるからである。つまり、仏教とは自分で意識的に自己を作り上げることにあるからである。

現代のブルジョアや貴族、労働者やプチ・ブルジョア、農民やサラリーマンをとらえている生活水準、生活様式、

生き方を超えて、生き、考え、感じ、そして自己と関係するすべが存在する。  
もつとも西洋文明についてマックス・ウェーバーは二つの可能な未来しかないことをすでに見ていた。すなわち「まったく新しい預言者、あるいは古い思想と理想の力強い再生」による信仰の復活か、または「ある極度の空しさを伴つた機械的な硬直化」、つまり「魂も展望もない専門家と心を失つた享樂主義者」の成果を除くすべての人間的成果が不可能になるかである。

預言者はなくとも、再生は可能である。後で見るようには、仏教はまた、非常に進んでおり、いまだにその生をたもつてゐる古代の地中海生活の哲学でもあつたのである。機が四つのそれぞれ関連する局面において世界をゆるがしてゐる。

ところでわれわれの世界には、いまや意識と自由の新しい段階へと向かう機が熟しているように思われる。危機が四つのそれぞれ関連する局面において世界をゆるがしてゐる。

つまり、経済、環境、社会、そして世界についての諸々の価値と觀念である。危機は深刻なものである。これにしたがつて、これらの価値が主要な変数である。それが、われわれの眼前にある本質的で緊急な任務は、われわれの文化の一般的枠組み、倫理的及び審美的価値、規範、われわれ自身と他者に対する態度、形而上学的問題に向う立場、そして世界についての觀念と認識を構築することである。人類進化における偉大な革新、すなわち自由の跳躍とは、これらを意識的に選択することである。ところが人々が自ら選択することなく作り、理解することなく受け入れた歴史によつて、これらのことがあなべての人に押しつけられているのである。

この心踊る本質的な任務を達成するために、われわれはいくつかの手段を持つてゐる。われわれの枠組みの母体であり、精神の母であるわが固有の歴史は、その中でわれわれが選択する具体的、個別的な諸価値の自然で主要な源である。しかしわれわれの精神、われわれの反省

さらにまた、深遠なる仏教は、その通常の実践において、人格的、個人的な側面に関する極めて独特な方法がある。これは苦惱、不安、苦痛、悲嘆など（これらすべては、われわれ固有の心理に原因の一端がある）を除くため

に、われわれ自らの心理現象を制御し、これを構築するということである。

こうした治療とは別に、仏教はわれわれの心的能力を増大させることもできる。これらのため、仏教は心理現象、哲学的態度の認識と自己形成の実践的方法を与えてくれる。

他方、この心理の認識は、人間存在に関わるすべての現象を理解し、これに働きかけを行なう際に必要でもある。

あらゆる苦悩の共通の原因は、苦悩するこの「私」である。これを分析することが、苦痛を効果的、持続的、一般的に減少させる鍵である。仏教はこの発見から出发する。したがってこれは、主たる原因が「私」の感情であるような苦悩に対し特に適している。そこで、「発展した」諸社会の個人主義の結果であるといえる現代世界のすべての悪に直接的であれ、間接的であれ、当てはまることがある。

というのもこの個人主義は、「伝統的」な諸社会とは対照的に、欲望を常に増大させ、欲求不満や生存競争を

引き起こし、その中で自由への欲望は、抑圧され、選択と責任の不安をもたらし、社会を予測不可能なものにしているからである。

またこの個人主義は、アノミーや孤独をもたらし、社会的紐帯は個別化するにつれて非人格的なものになり、競争が激化し、地位獲得と社会関係構築の必要が生まれ、他者の評価は絶対的な圧政のように裁判官を越えた者の声として本来評価不可能な行為にまで及び、肥大化した自我を恼ますが、これが愛によつて報われることはないのである。

これらの悪を治癒する一つの方法は、個人的自由を放棄することである。もう一つの方法は、これとは逆に、この自由を拡大し、自らの欲望と感情を選択し、自己自身によって自己を形成し得るようになることである。いかえれば、ファシズムか仏教かである。以上が自由主義に対し聞かれている解答と未来への選択肢であるが、この半自由は、多く人々が何をなすかを決定し、何を所有するかを稀に決定するが、決して何であるかを決定しないのである。

したがつて仏教は、個人が自ら個人を乗り越えるといふ方法で自由を救うことができる。現代世界においては、自由が部分的で不完全でしかないがゆえに不安が生じるのであるが、仏教は現代世界における自由の価値の擁護者である。仏教は、自ら存在することを欲することで西洋を救うことができる。

なぜなら、ある種の伝統は生活にとって塩のように価値があるのであるから、これを守り、再建しなければならないとはいへ、第三の選択としての伝統への回帰はほとんど不可能だからである。仏教のみが人間を隸属性から解き放ち、自由を内容豊かなものとして救いあげることができる。仏教は解放の達成であり、この解放はバステイユ牢獄を取り払うというよりは、むしろ獄舎を宮廷に変え得るものなのである。

したがつて仏教は、まさに現代世界が必要とする治療法である。しかしこの定めは偶然ではない。なぜなら第二のものは、第一のものの結果だからである。つまり（古代を介した西洋への影響を）以下に見るが、人類は、一方

で、人間、人間的自由、普遍的人間に關する相互に關連した諸観念を、他方で、普遍的因果律という仮説、最後に自己認識の観念と方法を仏教に負うてゐるからである。

最初のグループからは普遍的たらんとする使命を帯びたすべての運動（宗教、イデオロギーなど）が由来するが、これは仏教を筆頭として、ストア主義、キリスト教、イスラム教、また現代の偉大な非宗教的イデオロギーたる自由主義、社会主義など連鎖的に続いている。因果概念とともに科学を生み、自己認識の観念とともに哲学を生み出した思考の自由性もまたここから出てくる。交換に適用され、自由は企業と市場を生んだ。科学とこれに由來する技術とともに、この企業と市場は世界のあらゆる経済的、物質的成果を創り出した。また同時にこの人間の実現に導くのである。

しかし、われわれ西洋の歴史を理解するために仏教思想を知ることが必要であるのは、このことがまた世界全

体の歴史と現状を知り得るためのより賢明な準備でもあるからだ。なぜならイラン、あるいはイスラム圏から東の、人類の半分は（現代ヒンドゥー教を介してであれ）宗教的素地の中から出ているからである。これらの文化のすべては、深遠なる仏教という同一の観念的心臓部（*coeur conceptuel*）から湧き出しており、それぞれが仏教の色彩豊かな衣であり、光輝く礼装であるといえる。仏教を知ることなくして、これらの文化を理解することはできないのである。

したがって、現代人類の本質的部分は、一千五百年前にエヴェレストの山麓から湧き出て、ここから地球全体に流れ出したと述べても過言ではない。なぜなら、インドヨーロッパの賢人カピラ、マハビラ、ゴータマはここで生れているからである。しかし古代思想を介して西洋に伝わる中で、「人間」はついに「天地創造」思想によつて失われてしまった。

ここにおいて「人間」は、自ら自己を創りあげることができるという考え方を捨て、人間を個物へと変形させてしまつた。幸福を苦痛とともにのみ、存在を苦惱とともに

次いで、意識的な文化建設の試みに向けて、哲学的選択、心的態度、心理科学、認識と改良の方法、理解、美学、制度的構造などの適切で、大胆かつ根本的な諸観念を現代世界に提供すること。

最後に、われわれの時代の地球的惨劇、現代性による諸文化の圧殺を知り、これを治療すること。

進取性に富み、あるいは分析的な、あるいは学問的な、あるいは科学的な、あるいは理論的な深遠なる仏教は、人間と人生の心理学であり、哲学である（これに自己認識と自己形成の相互に関連した心的方法を加えることができよう）。

深遠なる仏教は、進歩的で、また深められた科学であり、仏教が説く言葉の深い、あるいは真実の意味である。仏教の流派は表面的には極めて多様であるが、深遠なる仏教はこれらすべての流派に共通するものである。より一般的言うならば、これは東洋思想全体の、洗練された部分、基礎（あるいは最先端）である。

仏教はこの深遠なる仏教を（括弧つきで）「仏教」、あるいは仏教そのもの、あるいは本来の仏教、あるいはま

にのみ許す、不完全で偽りに満ちたわれわれの自由の概念は、ここに由来するのである。

深遠なる仏教は、至高の解放を目指す哲学的心理的方法によって、欠落したもの回復する。しかしさらに、仏教はこれに二つの有益な特徴を付け加える。一方で、仏教は西洋的でもなく、また現代的でもない。他方、仏教は現代思想とともに、もちろんの差違と対立を提供するが、いくつかの例外的な共通点がこの二者を他のほとんどすべての思想から区別するのである（たとえば、人格主義、合理主義、決定主義、科学的方法、幸福主義）。この三局面により、深遠なる仏教は現代社会に三つの奉仕をなすのに唯一適したものとなつてゐる。

まず、現代世界をして、自らに自己を知らしめること。なぜなら、一つの文化をよく知るためにには、他の文化の観点からこれを見る必要があるからである。つまり、この仏教という天文台から我々の文化を観測して、ここにわれわれが発見するものこそが本質的であり、これは他の方法では得られないものである。

この思想は、（治療的）意図、極めて洗練された心理学的理論、自己の理論（自我、私、個人、人格）、についての理論（幸福追及のための）個人的行為の倫理学、認識論、（心理現象の）認識方法、存在論、そして形而上学的問

題に関する立場を含むものである。これらすべての要素が、緊密に統合されており、相互に関連づけられている。

最後に、この思想を知り、理解し、それがいまなお留保しているいくつかの根本的問題を解決し、それをわれわれの問題、それによつて救われ得るわれわれの文明、そしてわれわれ自身に適用することが残つている。

### 西洋の無意識

「東洋の哲学は、われわれ西洋の哲学とは極めて異なるものの、われわれにとってはかりしれないほど貴重な宝庫である」。今日までの西洋の思想家で仏教について最も精通していた精神分析家C・G・ユングはこう明言している。<sup>(5)</sup>

彼はこう正確に述べる。「東洋の心理学の知識は、実際、西洋の心理学のあらゆる客観的理解のための、同様に、これを批判するための不可欠の基礎を与えてくれる。そして、西洋の文字段どおり悲しむべき精神の状況を見るにつけ、われわれの西洋的偏見をより深く理解することの重要性が過小評価されではならないであろう」。<sup>(6)</sup>

に辿つていいた」と指摘する。

そして、これが、西洋文明の「不安」と「欲求」によって心をかきたてられ、諸問題を解釈し、文明を理解し、人間を説明しようとしている現代西洋のすべて思想家に起こつていることなのである。彼らは最小限の深さには達している。

精神分析学、実存主義、分析哲学、現象学そして心理学など、現代思想の栄光は、しばしば東洋の最も優れた諸学者が年來理解してきたものの微少な部分を再発見させたにすぎない。その部分とは、後にもみるように、萌芽的で部分的な原仏教として、多くの側面においてあらわされている。

また、われわれがアジアに生まれた人間の学を、西洋と現代にとつて單に有用なものとするだけでなく、実際、他の何に対しても西洋の諸々の問題、欲求、状況に対する、他の何にもまして適合的なものにするために提示する諸理由に加えて、ユングは一つの理由をあげている。

それは西洋における無意識は、東洋の「明らかなる」心理態度と非常に似ているように思われるという点である。ユングはこう結論しているが、その説明は少なくとも一抹の真実を含んでいるようだ。したがつて東洋の心理学は、直接的観察によつて比較的容易に心理的構造、あるいは心理的現象を発見できたが、これらは、われわれ西洋人にとっては、無意識の中に埋もれており、本質

的たりうるものとなつてゐる（そしてたぶんわれわれ西洋人は、まさにこれらを意識にのぼらせまいと多大な努力をしているのだ）。本質的とみなしうる心理現象は、西洋にもやはり同様に存在することはもちろんだが、少なくともこれは西洋より東洋においての方がはるかに容易に知覚されうる。

心理態度の形成における文化の重要性を考えてみただけで、これらの違いを説明するに十分である。そしてこうした違いは、深遠なる仏教のわずかな心理学的優位を説明しよう。したがつてもし東洋の心理学やこれの伴侶である東洋哲学の諸側面を奇妙でなじめないと感じる西洋の精神があるとすれば、それは多くの場合、單に西洋の意識的な思想が自らの無意識をそう感じるからである。

この無意識は、意識に対して過去には、恐るべき悪魔や支配者たる魔物を課し、現在は神経症、精神病、神経衰弱を引き起こしている。そしてこの苦惱に満ちた自己疎外と自己分裂に終止符を打ち、魂と感覺の平和を意識にもたらし得るのは、この無意識を認識すること以外に

ユングはまたこうも述べる。ヨーロッパにおける人間の魂の理解と「医者として」のその実践は、仏教思想すなわち、「尽きない助けと刺激」、「多くの刺激的な観念と発見」、「多くの根本的な認識」に負うものである。しかし彼は付け加える、「この仏教思想に精通するために洞察力によつて本質的に彼がなしだ」とある。なぜなら彼の仏教に関する知識は極端に少なく（いくつかの短い文献）、それほど深い知識はもつていなかつたからである。それでもなお、仏教について最も知つていた西洋の思想家は彼なのである！しかし彼は、「どんなものであれ仏教について知る前に、何世紀も東洋の最も優れた精神をとりこにしてきたこの秘密の道を自分も無意識に辿つていいた」と指摘する。

そして、これが、西洋文明の「不安」と「欲求」によつて心をかきたてられ、諸問題を解釈し、文明を理解し、人間を説明しようとしている現代西洋のすべて思想家に起こつていることなのである。彼らは最小限の深さには達している。

ないのである。

しかし現代的な問題に関して深遠なる仏教に適切な答えを仰ぐ主な理由は、それが自我と自由にかかわる問題になつてゐるからである。

### 自由への道程

さて、二つの事柄が、とりわけ現代人に影響を及ぼしている。すなわち自由の欠如と自由である。この自由があるために、人は選択、不安、責任、そして孤独の苦しみを味わうはめになるのである。この苦悩には、二つの処方がある。

すなわち、自由を減するか、あるいはもやは苦しみを体験しなくともすむ状態を選択し得るほどに自由を拡大するかである。いいかえれば不安から解放されるか、あるいは自由そのものから解放されるかである。したがつて、何者かによる、あるいは再発見ないしは新たに創造された伝統による独裁か、または仏教をとるかというところになる。

しかし伝統だけでは自由を窒息させてしまい、赤ん坊

る。

そしてそれはまったく、他者との多様な関係の中にある諸個人によって十全に成り立ち、またそうした関係によって形成されるものとして描かれた最初の社会でもある。現代の他の諸側面は、そこから生じている。個人といふ観念は、このように、社会を考える際のわれわれの思考やわれわれの諸制度の素材であるだけでなく、同時に自由な交換から生れた「産業革命」や、自由な思考から生まれた科学の素材である。

個人の自由は、現代を分かつ二つのイデオロギー、すなわち自由主義とマルクス主義の倫理的な準拠点である。自由主義は、賃金制度を自由な交換として正当化し、マルクス主義はこれを、自由の窃盜、そして偽善的奴隸制度である搾取として隸属的なものと判断している。しかしわれわれの世界を作りあげたこの個人主義は、すでに指摘されてきたように、この世界の深い苦悶の中心的な原因でもある。近代人は自我という病気にかかっている。その世界は何よりも、それぞれの「私」に苦しんでいる。エゴというのがその病名である。痛切な不如意を

を風呂桶の水に投げ込んでしまうようなことにもなる。

また伝統の多くは、何者かによる独裁でもあった。そのうえ過去への単なる回帰は、ほとんど不可能に思われる。逆にファシズムは、どのような形のものにせよ、起これば得る可能性が極めて高い。しかしファシズムは豚肉を調理するのに、納屋ごと焼いてしまったものである。

したがつて、もし現代社会の問題を解決しようとして、單一の伝統に戻ることができず、独裁的な解決法を望まないというのであれば、ひとはより深い自由、すなわち仏教を指向することを余儀なくされるのである。そのうえ以下に見るよう、多くの変数を考慮する時、これこそが歴史が示してくれる方向なのである。

ここでいう自由とは、まず個人の自由ということである。ところで、この個人は、現代西洋文明においては、特殊な、そして中心的な役割を演じているが、そこでは個人の自律性というものが、議論（説明）の源であり、正当性の土台、権利の対象となつてゐる。現代世界の人間が最初の個人主義者だという訳ではないが、近代社会は何よりも個人の集合体とみなされた最初のものであ

を感じる者がいたり、大きな不快を感じる者がいるのは、社会における強い「平等主義」の帰結である。

それゆえ現代の中心的問題は、個人の自由を制限することなく、むしろ増大させながら、個人主義のそうした帰結を取り除くことである。この病には三つの処方が可能である。そのうちの二つは、伝統とファシズムであり、これらはすべてを根絶してしまうことになる。残るは、この個人というものがまさしく何であるか、そしてこの病から逃れるために、その正確な原因が何であるかを分析することであろう。これこそが仏教の主題なのである。

仏教は個人の発見者であると同時に、その中心的教義は、「非我」と呼ばれるものである。不幸にも、仏教から古代ストア主義へと至る間に、個人は、その解毒剤である非我を失つてしまつた。しかし個人は自己形成、すなわち自ら自己を形成するという観念と方法を保持し続けていた。しかしながら、古代から現代へと移っていく間に、そのすべも失つてしまつたのである。創られたも

のとしてでなければ、与えられたものでないとすれば、自らを考える存在となるために、個人は自らのエネルギーを外部に振り向け世界を変えようとしたのである。というのも、個人は自分自身を、表には巧妙で有能な存在として描き、心の底では不器用で痛ましい存在として描くことができないからである。

それゆえ、その解答は、種々の文明、大陸、そして数千年を通じての個人のこの長い歩みの中で失われたものを再び見い出すこと、また人間という概念、そして人間の自由という概念の源である二千五百年前のインド（これから人間の西洋的、現代的な冒險が始まるのだが）に立ち戻ることにある。

しかしながら、この解答は歴史の方向もある。われわれの現代性は、この九世紀間に西洋世界の中心で生れ、徐々に育ち、近年他の世界に急速に広がった。個人と自由が、その中心的特徴である。個人はこうして社会から現出した。そして自由は新たな空間、新たな領域を手に入れた。その歩みは時にゆっくりと、時に政治、経済あるいは習俗の「革命」の形をとつてすばやく、また後退する理由である。

ができたのである。しかし、この内的領域の性質と幸福への願望とが、常に必要な認識がここにあり、かつ十分であるようにするものである。人は自己を知ることにより、自ら解放される。そして、この意識こそが、まさしく深遠なる仏教であり、それはこの意識から自己形成の方法を演繹している。

したがつて仏教とは、解放の完成である。仏教は現代性のはるかな源であったが、今や現代性の未来としてあらわれている。認識は、この運命を予見し、導き、最良の場合には実現し得るのである。いくつかの理由——その各々が十分なものであるが——によつてこの結論が導かれるのである。それらを正確に述べよう。

一つには、人間とその心理現象についての仏教的認識である。これほど深い洞察力をもつたものは他に類がない。その各々が十分なものであるが——によつてこの結論が導かれるのである。それらを正確に述べよう。

によって中断されそしてなお未完のままである。しかし長い道程におけるグローバルな傾向性は明らかである。他方、自由とその使用は、必然的に様々な可能性についての認識と意識を伴う（認識というものがふつう合わせもつ性質が、歴史は一つの指向性を持つてゐるということの主たる理由である）。

しかしこの数世紀にわたる運動は、今や転機に立たされている。物質的、経済的、人間的、集合政治的（民主主義的）、文化的自由の太いなる獲得と、無知の圧迫による後戻りのあとで、時代の波が新たな領域の入口に押し寄せてゐる。すなわち、その新たな領域を征服しつつ、個人は自ら解放されていく。いいかえれば、ますます自由との間の結合関係の大いなる逆転である。

自由は個人のためにこの九世紀の間働いてきたのであるが、今や個人に対して敵対し、可能な限り破壊しようとしている。自由があればこそ、個人は自らの意志と知識を何らまじり気のない、他に介入を受けないものとし、矛盾も破壊もなく、文化を選択することから逃れること

い。

もう一つは、われわれの文化の鍵ともなる概念が、仏教に起源をもつということ。すなわち人間、個人的自由、普遍的人間、普遍的因果律などである。

しかし、最も肝心なのは、おそらくこの仏教が、非西洋的、非現代的世界についての一般的な諸見解の中で、はあるか以前からもつとも洗練されたものだということである。というのも、何かをよく理解する場合には、それを同時にごく近い所とごく遠い所から、すでに見ていいなければならないからである。自ら自己を知るには自らを客観的に分析できなければならない。

ひとつの文明を理解し得るには、その文明とすでに体験し、同時に他者の目でこれを眺めることができなければならない。しかし、それを把握するのみならず、可能ならばその視線は対象となるものを貫き、これを科学的に分析しなければならない。

したがつて、われわれの社会と現代文明を理解するには、その中に身を置きながら、深遠なる仏教の視点と理論を同時に適用しなければならない。深遠なる仏教は決

して他の代替であるものではない。あるいは、それはごく  
つかの側面ではわれわれの社会と現代文明から可能なか  
能く、ゆいとも遠く離れており、これが、他の側面では  
それらに同化しながらも、同時に必要な「間隔効果」を  
与えるのであり、また理解と対話を根りかせるものなの  
である。

註

(1) 同様に、「覺醒した」という言ふられるブッダ  
(buddha) は、実は「英知（知性）のある」という意  
味であり、「覺醒した」という訳は、むしろボディサッ  
ムウカト bodhisattva 「知（bodhi）の本質」によざわし  
こ。

(2) Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie 等よび  
Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre. 等よび L.  
Strausse, Droit naturel et histoire, Ed. Plon, 1954. 等  
見よ。

(3) ナーダが有名なスゥバ・ベッタ (Soubba suttta) 第  
九九章を締めくへた、「私は教条主義者 (dittihivadi)  
ではなく、分析家 (vibhajjavadi) やある」の意味や、  
深遠なる仏教の文献的な出発点は、ナーダの「遺訓」や  
あり、知られる最も古い文書 (バーイ語翻典) やある。

つの「藏 (pitaka)」の最後のもの（最も深ふもの）、ア  
ビダハマ (Abhidhamma) である。しかしこの文献は、  
口伝による古典的分析の記憶の集成にすぎない。そ  
して、一十世紀間にわたる発展は無限の広がりをもつて  
になつた。一番田の出発点は、マディヤマカ  
(madhyamaka) である。

(4) サンスクリット語用 (yoga) は、アーナンダ語用 (yoga)  
クシマ (結合 junction) によつた。またコソジュガ  
ル (夫婦の、conjugal)、ヒュ (へひや) jug) なども、  
ハリから派生したもの。ルツシマ (宗教 Religion)  
は、注意深く觀察する」ととを意味するレ  
レゲン (relegere) が由来である。しかし公式の (セー)  
で誤った)語源は、「れをレリゲン (結び付ける religere)  
から来たもの」とし、これにストア哲学に影響された教父  
によつてあらためたヨガ (yoga) の意味を与えて、「が、  
この闇黒だけはストア哲学に影響された教父によつてな  
れれたのだが、ストア哲学全体がはるか以前におこつて  
ハム佛教思想に影響されてもゐる」のは確実である。

(5) Der Weg zum Selbst : Lehre und Leben des indischen  
Heiligen Shri Ramana Maharshi aus Tiruvannamalai, (H.  
Zimmers 著 Zurich, 1944) の序文で、『Les saint  
hommes de l'Inde』。

(6) Ostasien denkt anders, Zurich, 1950. の前書き。

(7) Sur les discours du Bouddha 等よび BardoThodol

の序じよがく、彼は「ナグームの死者の書」が彼の  
「たゞれる伴侶」であったと述べてゐる。

- (8) 注の参照。  
(9) Le Secret de la fleur d'orの序説。  
(10) 注の参照。

(トランス社会科学院教授)

訳・高橋寿美江

〔附録〕本論文は、セルジュー・コルム著『幸福の皿田』の序  
文を訳出したものである。